過ぎし短編酒場

runaway

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

過ぎし短編酒場

【Ｎコード】

Ｎ１９３０ＢＡ

【作者名】

ｒｕｎａｗａｙ

【あらすじ】

個別に投稿した短編をまとめました。当方マイページ内のシリーズ『ひみつの小話』に入っている読み切り群です。すべて再録で、新規投稿の話はありまっせん。今後も単独で公開した話をあとから収録していく形になります。

天運いまだ尽きざるか（前書き）

夏休み明けのある朝、友人にたたき起こされた。「助けてくれ！俺のロルティエニィルが！」あなたのかわいい守護妖精さんが、もしもスゴイ魔法を覚えてしまったら…。

天運いまだ尽きざるか

「助けてくれ！　俺のロルティエニィルが！」

夏休み明けのある日の早朝、血相を変えて部屋にやって来た友人にたたき起こされた。

聞けば、彼の守護妖精が魔法を覚えてしまったのだという。

守護妖精はすべての人間が持っている。

たいていは夜道を照らす懐中電灯程度の役にしか立たないマスコットだが、ごく稀に特殊能力を身に付けることがある。能力が発動するきっかけははっきりせず、完全に運に左右されるものと言われている。

しかも諸刃の剣とも言うべき代物で、妖精との関係が良好ならば多少コントロールできるが、そうでないことも多いのだ。うっかり発火能力などが目覚めると、政府の隔離施設で一生過ごす羽目にもなりかねない。

友人の場合は山岳部の合宿で登山中に滑落して死にかけたが、守護妖精の羽の粉を浴びたらあっという間に傷も痛みも消えたのだそうだ。

治癒系、しかもかなり強力なもののようだ。

「制御は？」

尋ねると、友人は妖精を見て、それからこちらを指差した。

すると蝶の羽を持つその可愛らしい妖精はこちらにふわりと近寄り、くるくると舞った。羽の辺りから鱗粉のような光の飛沫がこぼ

れ、同時に寝起きのだるさと眠気が拭い去られた。
「うわっ、これ、リザレクションじゃないか」
「そうなんだよ」
彼は途方に暮れたように嘆息した。
体力回復系の「ヒール」・外傷治療系の「ケア」・病気快復系の「キュアー」などのすべての効果を併せ持つ“復活”――「リザレクション」。死者の魂を一時的に呼び戻す「コーリング」と同等かそれ以上とされる、治癒系の中でも最上級の能力だ。
とてつもなく貴重なこの能力とその持ち主は、コントロールの可能不可能に関わらず国宝の一種として扱われる。一生食うに困らない生活を保証されるが、その代わり自由は失う。
探険家になって世界の山と海溝を制覇するという友人の夢はおろか、近所の裏山や田んぼの用水路にも近づけまい。
「どうにかしてくれよ。お前、“書き替え”できるんだろう」
「馬鹿、声がでかい」
「積み換え」や「書き換え」。
――文字通り妖精の能力を改変してしまうことだ。
魔女の家系などに時折見られる霊感の強い人間の能力で、もちろん無許可で行うのは違法行為だ。
霊能力者は守護妖精や霊界研究になくてはならない存在だが、モルモット扱いされるのを嫌がって自分の力を隠している者が多い。
自分もその一人というわけだ。
「まあ、いいけど。もったいないな。リザレクションなんてあった

ら、探検の役に立つだろうに」

友人はきっぱりと首を振った。

「そういう逃げ道があると、かえって油断しちまうよ。それに、ああいうことは自分の力でやり遂げるから意味があるんだぜ」

「そんなもんかね。で、妖精ごと積み換えていいのか？」

「嫌だ。ロルティエニィルは俺の相棒だ」

「判ったよ」

彼の妖精は抗議するようにくるくると飛び回ったが、最終的には同意して能力を手放した。

リザレクションの能力を移し込んだ硝子のビー玉は、素晴らしく美しい薔薇色の光を放った。小壜に入れるとまるで携帯ランプといった趣で、電気代が払えない時に重宝しそうだ。

「ほら、持っとけ」

「お礼にやるよ」

渡そうとすると友人はあっさりと言って、ほっとした様子で守護妖精と共に去って行った。

だが軽やかな足取りを見送りながら、ちょっと不安を覚えないでもなかった。

案の定、次の春に彼は再び泣きついてきた。

卒業旅行（探検）先のツンドラで襲ってきた虎が、ウサギに変化したらしい。ミューティー能力を移し込んだビー玉は、鮮やかな紫色になった。

それから五年の間に、私は十個近い光る硝子玉を入手することに

なった。

なんとなく予想できなくもない事態だった。

恐らく守護妖精の能力の発動条件の一つには、宿主との結びつきの深さが関係するのだ。彼は妖精をとても大事にしていたし、妖精も彼を愛しているようだった。よほど霊格の高い妖精だったには違いないが、彼女は彼を護ろうとして様々な能力を発現させたのだろう。

そして――。

さらに一年後、彼は行方不明になった。

世界一の深さとされるセタ・イー海溝で消息を絶ったのだ。

遺体は見つからなかったが、生存は絶望視された。彼の葬儀も営まれ、墓標には「世界の最深部で眠る男」と刻まれた。

だが私には彼が死んだとは思えない。

彼が行方不明になったあの日、突然まばゆい光が部屋に溢れた。調べてみると、転移、変化、時間歪曲など、硝子玉の幾つかが割れていた。

半年経った頃には、リザレクションの硝子玉が割れた。

またどこかの崖っぷちで足を滑らせたのだろうか。

ともあれ、今も彼と相棒はどこかの異世界で冒険を続けているに違いないのである。

天運いまだ尽きざるか（後書き）

そして異世界トリップした友人とチート能力搭載の妖精さんが繰り広げる愛と感動の冒険譚へ…！

とは続きません。

２０１１年９月２８日投稿

ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ１２０２ｘ／

月夜ばなし（前書き）

月にちなんだ短い話を集めました。

月夜ばなし

【天体観察会】

よく晴れた日の夜、星空観察をしようと勇んで出かけた。
だが今夜は満月。月光が明るすぎて、星がよく見えない。
「この邪魔な満月め！」と怒ったら、「なんだとコノヤロウ」と月も怒ってびかびかと余計に明るく輝きだした。

今では夜も昼のように明るくなり、星を拝めるのは皆既日蝕の時と新月の晩だけになってしまった。

【月食】

夜に散歩をしていたら、急に腹が減ってきた。
周囲にはコンビニも自販機もなく、家に戻るまで我慢できそうにない。ちょうど目の前にあった満月が大福みたいで旨そうだったので、空からもいで食べてしまった。

以来、食べた月の呪いで俺の身体は満ち欠けするようになった。
腹が減って減ってしかたないので、食べまくると腹がボールのように膨らんでまん丸に太り、限界まで太るとまた痩せていくのだ。
そして痩せてがりがりになるとまた食べたくなって――。
「お前、ダイエットとリバウンドの繰り返しは身体に悪いぞ」

月のせいなんだってば。

【酔っ払いのたわごと】

遅くまで酒を飲んだ帰りに、飲み仲間の一人と月見をすることにした。

突発的な思いつきだったので、当然満月なぞ望むべくもない。半月以上満月未満という中途半端な月をカップ酒片手に眺めながら、あることないこと言い合った。

彼がしみじみ言った。

「こうして見ると、月の奴もけっこう可哀想だよな」

「なんで」

「満月の時と三日月の時しか注目されないだろ？　他の日はなんて言うか、準備中って感じでさ」

「そうかもなあ。昇る時間もまちまちだし」

私は月を眺めて思いつくままに言った。

「なんかストリップみたいだよね」

「なんだそりゃ」

「ちょっとずつ欠けて、ちょっとずつ満ちてっていうのがさ。焦らされてる感じがするよ」

「うーん、逆にそう考えたら、色っぽくていいんじゃないか？　男の肥大した妄想を刺激して」

「ははは、そりゃいい。今度皆に提案するか」

だが翌日から、月の満ち欠けがおかしくなった。
どうやら、準備中と哀れまれる案もストリップと見なされる案もお気に召さなかったらしい。毎晩の変化が新月→三日月→満月→三日月→新月のサイクルになり、間がなくなってしまった。

いくらなんでも極端すぎて風情がない。
近いうちにあの時の相手を誘って、また月見酒をしなければ……。

【週末の計画】

週末を利用して、月へ釣りに出かけた。

だが到着して虹の入江にある釣り船屋に行くと、管理人の月兎に「今日は大潮だから、静かの海も雨の海も船は出せないよ」と言われた。

あ、そうだ。
満月時と新月時は、月で海釣りはできないのだ。

前回新月で海が完全に干上がっているときに来てそう教えられたのに、すっかり忘れていた。
こんなことならもうちょっと足を伸ばして、火星の運河に行けばよかった。

せっかく来たのに手ぶらで帰るのもなんなので、宙港の土産物売り場で月魚の干物と名物・もちつきうさぎもちを買って帰った。

だがみんなからは「月くんだりまで行ってボウズか」「今どきうさぎもち買いに月に行く奴なんかいないよ」と馬鹿にされてしまった。

くっ。

次こそは……。

【取り分】

満月を眺めながら月見酒としゃれこんでいたら、月が降りてきて「儂にも酒をくれ」とせがまれた。

手持ちのカップ酒とつまみを分けてやると、月はその場で一気にがぶ飲みして三本ほど空けた。あげく、酔っ払って「うーい。呑んだ呑んだ……」とさっさと西の空に沈んでしまった。

「綺麗な月だったのに、ろくに見れなかったよ」

翌日、友人にこぼすと彼はとがめるように言った。

「お前、ひょっとして月見団子と酒を供えなかったんじゃないか？」

「そんなことして何の役に立つんだ」

「馬鹿。自分の分がちゃんと用意してあるって判れば、月だって焦って空から降りてきたりはしないんだ。昔の人の智恵を馬鹿にしちゃいけないよ」

そうか……。

そうか！？

【月夜ばなし】

友人の家に遊びに行って話しこむうちに、すっかり夜が更けてしまった。
泊まっていけと言われたが、明日は朝から仕事がある。帰らなければならないと言うと、彼は「夜道は危ないだろう。これ持ってけよ」と言って、沈みかけた月をひょいともぎ取り、紐をつけて棒の先にくくりつけた。
月提灯はほんのり明るく足元を照らしてくれて、無事家まで辿り着けた。
でもこんなことして、大丈夫なのか……？

案の定、翌日から月が昇らなくなった。

参ったなあ。今度の満月のときには、夜九時ごろに皆既月蝕が起こるのだ。天文ファンや小学生が楽しみにしているに違いない。
戻しかたが判らないので、早くまた彼の家に行かなければ。

【メタボリック・ムーン】

久しぶりに月を見たら、ずいぶん大きく見える。

「ちょっとちょっと、お月さん、太ったんじゃない？」

声をかけると、月は決まり悪げに応えた。

「ばれた？　やっぱり。最近動くのが面倒になってねえ」

「あんまり近づくとぶつかっちゃうよ」

「判ったよう……」

月はため息をつくと、西に向かってダッシュした。天頂からみるみるうちに西に沈み、しばらくして東からまた昇って西に向かう。一周するごとに少しずつ月は小さくなっていった。

五周ほどしてから、元の場所に収まった月が言った。

「さあ、どうだ。もういいだろう？」

加速による遠心力の増加で少し地球から離れた月は、自信たっぷりに言った。確かに、見慣れた範囲の大きさになっている。

「うん。いいね」

「ああ疲れた。少し休もう……」

「３６万キロ以内に近づかないように気をつけなよ」

「判ってるって。遠地点まで離れたからしばらく大丈夫だよ……おやすみ」

それきり月は沈黙した。

やれやれ。月のマラソンに付き合って、すっかり夜更かししてしまった。

「おやすみなさい」

私は４０万キロ地点に浮かぶやや小さな月をもう一度見て呟き、家に入って寝た。

【闇夜ばなし】

新月の晩、飲み屋で隣に座ったやつと意気投合して夜通し飲み明かした。私は途中で酔ってペースを落としたが、やつはザルのように底なしに呑み続けた。

朝方に別れた時は流石に千鳥足で去っていったが、それにしても凄いやつだった。

その晩、爪の先のような細い月が、よろよろと昇ってへろへろと西の空に沈んでいった。

月も二日酔いになるらしい……。

【月がとっても蒼いのは】

昔はな、月には二柱の神がいたのよ。蒼と紅の双子神がな。

だから月は蒼と紅の二色が割合を変えるだけで、いつもまん丸だった。よく満月の光は人を狂わせると言うが、昔の月二回、蒼と紅が半々になるときに降る紫の月光ほどではないのう。

ところがあるとき二人は喧嘩してしまったのよ。

自分だけが主役になれるとき――今で言うところの満月か新月の

ときじゃな――片方がちょいと貌を出して、色が混じってしまったせいだと言われておる。それで殺されてしまったのか、怒って出ていってしまったのか、紅の神がいなくなってしまった。

それ以来、蒼い月神だけが毎夜昇っては沈むようになったのよ。紅の月神の部分がすっぽり抜け落ちたまま、満ち欠けしながらなあ。

おしまい。

月夜ばなし（後書き）

２０１１年１１月１４日投稿
ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ５１３５
ｙ／

死出の旅（前書き）

ドライブで道に迷った…

死出の旅

ドライブに出て適当に走っていたら道に迷った。

引き返そうとしたものの、どうやら曲がる場所を間違えたらしい。いつまで経っても見知った道に出られそうな気配はない。

そうこうして闇雲に走り回るうちに、周囲が暗くなってきてしまった。

だが……夕暮れというよりは、なにやら不吉なたそがれた雰囲気だ。

いったいどこに来てしまったのだろう？

ふと見た標識は、現在位置が『黄泉路（よみじ）』、矢印の先が『冥府・彼岸』となっていた。

慌ててUターンしたが、しばらく走ると同じ標識が現れる。

恐慌に襲われるうちに、おぼろな記憶がよみがえった。

そうだ。

途中でトラックと衝突して、ガードレールを突き破って崖から転落して――。

車に乗っていたから、そのまま冥界ドライブになってしまったのだろう。

ううううむ。

……まあ、過ぎてしまったことは仕方がないか。

せめて最後のドライブを楽しむとしよう。

根っからの楽天家なので割り切ってはみたが、すぐにがっかりすることになった。
行けども行けども、目の前には単調な昏い景色が続くばかり。
ラジオをつければ、流れてくるのは陰気な風の音と怨霊たちのむせび泣く声。

ぜんぜん、まったく、ちっとも、楽しくない。

やがてあまりのつまらなさに、ふとろくでもない考えが浮かんだ。

――もし、黄泉路で死んだらどうなるのだろう？

もう死んでしまっているのだし、確かめてみるのも悪くなかった。
周囲はまばらに潅木の生えるのっぺりとした地面が続き、脱輪してもあまりいい効果は期待できそうにない。
すると、残るはあれか。

直線の彼方に次の標識が見えたところでギアをローにしてアクセルを思い切り踏み込む。
最大加速で路肩を乗り越え、標識の鉄柱に突っ込んだ！

凄まじい衝撃と同時に前に撥ねた身体がハンドルにぶち当たる。
破裂した内臓にへし折れたあばらが突き刺さる。

遠のく意識の中で殆ど恍惚となりながら最後に思ったのは、死んでいても死ぬんだな、ということだった。

ところが――。

目が覚めると、ちょうどひっくり返って潰れた車から引っ張り出されたところだった。

起き上がると救出してくれた人たちからどよめきが広がる。
大丈夫かと問われたので立ち上がって屈伸してみたが、痛む場所もない。それを伝えると再び驚きの声があがる。

確かに車はぺしゃんこで、乗っていた人間が怪我どころか生きているのさえ不思議な状態だ。
これは臨死体験で本が書けるかも、と思ったが。
誰に話しても「運がよかっただけじゃない」とまともに取り合ってもらえなかった。

確かに病院の集中治療室や葬式の最中に生き返ったわけでもなし、そもそも怪我さえしていない。
信憑性に欠けると言われればそれまでだ。

運はよかったけど、なんだか残念なような……。

死出の旅（後書き）

記念スベキ２０１１年１１月１１日ニ１１１１１字ノ話ヲ投稿シタカッタだけであります。しかしながら、１１時１１分に投稿できず残念無念。ならば２２時２２分に投稿してもと思ったのが２４分だったのも残念至極。くだらなくてゴメンナサイ。

２０１１年１１月１１日ｐｍ１１時１１分投稿
ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ４３８２ｙ／

はじめてのおつかい　そして料理　そして…（前書き）

さっちゃんのはじめてのおつかい、その果てに…。※黒童話。シュールちゅうい。世の倫理と道徳にいささか外れた内容をふくみます。

※中盤以降に道徳的に問題のある描写があります。ご注意ください。

はじめてのおつかい　そして料理　そして…

「いってきまあす！」

さっちゃんは元気よく言って家を出ました。
ポケットの中に買い物のメモが入っているのをちゃんと確かめてから、買い物かごを両手でしっかり持って市場に向かって歩き出します。

――あんなに大っきな声で言ったのに誰も答えてくれないんだから。

さっちゃんは寂しい気分で思いました。

お父さんも、お母さんも、お兄ちゃんも、このごろあんまりしゃべらないのです。
口を開くときは、怒るか喧嘩ばかりです。
そしてお母さんは昨日いなくなってしまいました。

「おやサリーちゃんじゃない」

歩いていたら、近所のイトハおばさんが声をかけてきました。

「一人でおつかい？　まだ六つなのにえらいわねえサリーちゃん」
「さっちゃんだよ」

さっちゃんはサリナスティという名前なのですが、サリーと呼ばれるのが一番きらいです。
だって「ほうきにまたがる女の子」って意味なんですもの。

「お母さんがね、いなくなっちゃったの。
だからさっちゃんがごはんつくるんだ。おいしいカレーつくるんだよ」
「あらあら、たいへんね。頑張ってねサリーちゃん」
「さっちゃんだってば」

イトハおばさんはおでかけのついでだから、とさっちゃんを市場まで連れて行ってくれました。

「べべんべんぼよよーん」

イトハおばさんは瞬間移動の魔法が得意なのです。

ひとりで市場に来たのは初めてです。
イトハおばさんと別れてからしばらく迷ってしまいましたが、さっちゃんはやがて目的のお店をみつけました。

＜野菜と薬草の店マリアンヌ＞

「すいませーん」

うす暗いお店に入ってさけぶと、まっくろい雨ガッパのような服を着たおばあさんが出てきました。

「いらっしゃい……おや、ヴァクマリエんちのサリナスティ嬢ちゃんかえ。なんの用じゃ？」

マリアンヌおばばは、いくつなのかわからないくらい歳をとった魔女のおばあさんです。この町のことならなんでも知っていて、「

ういっち　ざ　のうりっじ」と呼ばれています。

「あのね、お母さんがいなくなっちゃったの。
だからさっちゃんがカレーつくるの。だからこれちょうだい」

さっちゃんはポケットのメモをおばばにわたしました。
メモをうけとったおばばは、歯の少ない口を開けてふぇっふぇっと笑いました。

「そうかえ。とうとうやったかえ」

そして、「ちょっと待っておいで」と言うと、素早くメモに書いてある品物を集めてくれました。

「はいよ。これでいいかえ」
「あっ！
あのね、あのね、カレー粉も」

おばばの調合するカレー粉は、とても評判がいいのです。

「ねえおばばさま、みんなが幸せになる魔法はないの？」

おばばががりがりごりごりと香辛料を混ぜ合わせているときに、さっちゃんは聞きました。

「幸せねえ」

調合したカレー粉を包み終えると、おばばは店の奥に行きました。
やがて戻ってくると、カレー粉の包みと一緒に白い粉の入った小さなビンをさしだしました。

「それじゃこいつをやるぞえ。これを料理にちょこっとふりかけるがええ。そうすればとてもいい気分になれるぞえ」
「ほんと？」
「ほんとじゃぞえ。ちょこっとかけるのじゃ。ほんのちょこっとじゃぞ」

さっちゃんが喜んだので、おばばは嬉しそうにふぇっふぇっと笑いました。

「なにせ混じりっけなしのコカインじゃからのう。あまり多いとショック死しかねんからの」

こかいん？
しょっくし？

さっちゃんは首をかしげましたが、おばばは機嫌が悪くなると人をカエルに変えたりするので尋ねませんでした。カレー粉と魔法の白い粉のビンをかごの中に大事にしまってお礼を言い、お金を払ってお店を出ました。
帰りはお隣りのガーラルさんが買い物に来ていたので、ガーラルさんの空飛ぶ布団「メリケンＰ７号」に乗せてもらいました。

さあ、カレーづくりです。

さっちゃんが冷蔵庫を開けると、血のしたたっている新鮮なお肉が入っていました。
野菜カレーのつもりでしたが、お肉もいっぱい入れることにしました。
ちょっとくさいお肉ですが、カレーならわかりません。

――できあがったらおばばさまの魔法の粉をたっぷりかけよう。

さっちゃんは鍋に材料を入れながら考えました。

ちょっとでいい気分になるなら、たくさん入れたらすごく幸せになるに違いないもの……。

はじめてのおつかい　そして料理　そして…（後書き）

２０１１年１１月２６日投稿
ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ８７４８
ｙ／

聖夜に愛を呪う者ども（前書き）

クリスマスイブの夜、俺たちは居酒屋にいた――。もてない男たちが世のリア充を呪わんと聖夜に（酔った勢いで）立ち上がった！

だが彼らが呼び込んだのは…。クリスマスにあんまり幸せじゃない人たちの話。

聖夜に愛を呪う者ども

クリスマスイブの夜、俺たちは居酒屋にいた。
イブの晩、彼女のいない寂しさをまぎらわせるために男同士で寄り集まった、色気のかけらもないわびしい酒盛りだ。

だがそんな生傷を舐め合うような会で、気持ちよく酔えるはずもない。
最初のうちのやけくそぎみな空騒ぎが過ぎ去ると、ただひたすらに酒をあおり、ひたすらに世を恨み、ひたすらに愚痴をこぼす情けない集団と成り果ててしまった。

やがて一人が、ごん、とグラスをテーブルに叩きつけるように置いて雄叫びをあげた。

「俺はクリスマスなんか大嫌いだあ！」

すかさず、全員がうなずいて賛同の意を表明する。

「どうしてこの世の中にこんな日がなきゃあならないんだ」
「本当に、消えちまえばいいのになあ」
「どうにかしてなくせないものかなあ」

口々に言い合ううちに、議論がねじれた方向に熱を帯び始める。

「そうだよ、つまり、クリスマスなんてなくなってしまえばいいんだ」
「うん。それが一番だ」
「でもどうする」

「つまり元を叩けばいいんじゃないか？　クリスマスって、神様の誕生日なんだろ」

実はこの時点ですでに間違っている。クリスマスは神の子が人の子として地上に降誕したことを祝う日だ。神様というか神の子だし、生誕を祝う記念日であって、誕生日そのものではない。

だがもちろん、指摘するような理性が残っているやつは誰もいない。

そして今の俺たちにとってクリスマスが本来何をすべき日なのかは問題ではないしどうでもいい。あるのはクリスマスを口実に充実したリアルを二人で愉しむ者がいる――その憎むべき事実だけだ。

誰かがごくりと喉を鳴らした。

「こっ殺すのか？」

「それは極論に過ぎる。つまるところ、日付が特定できなきゃいいんだ」

「ってことは、もっとさかのぼってか」

「受胎告知を邪魔するとかどうだ」

「大天使ガブリエルをか。厳しそうだな」

「いや、ベツレヘムの星を博士どもから隠すぐらいでいけるんじゃないか」

「うん。いいかも」

「じゃあ、やるか」

「やるぞう！」

「おー！」

話がまとまり、みんなで気勢をあげる。

そうだ、俺たちにはできる。

ささくれ、荒んだ気持ちに取って代わって、心地よい高揚が一丸となった魂を満たした。

だが俺たちが一致団結してことを起こそうとしたそのとき、座敷のふすまが勢いよく開いた。

青い制服に制帽姿の人影が三つ。

先頭の一人が一喝する。

「こらー！　何をする気だ！」

何をする気って、まだ何もしていないじゃないか。

いくらおまわりさんだって、未遂にすらなっていない段階でその言い草はないんじゃないか――。

文句を言おうとしたところで、メンバーの一人が呟く声が耳に入った。

「やべえ、時空警察だ」

見れば、確かに先頭の警官の片目はぎょろりと青白く光る人工魔眼だ。

さらに、後ろに控える二人のうち片方はヘッドセットと一体になったごついゴーグルを着用し、もう片方は左腕に装着したハンドヘルドコンピューターのモニターで何かをチェックしている。

どこから見ても正しい時空警察、過去と未来の秩序を護る時の番人（タイムパトロール）のいでたちだ。

店員が俺たちの会話を盗み聞きして通報し、彼らは魔力が働き出すタイミングを見計らって踏み込んできたということらしい。

時空警察官が装備する三者三様の計器には、今の俺たちが使いか

けた術による時間連続線の歪曲波動がしっかりと記録されている。言い逃れはできない。

「あのね、そんなことできるわけないし、したって無駄なの。判るよね？」

全員分の違反キップをプリントアウトする間に、時空警察官は俺たちを諭した。

「クリスマスがなくなったって、今度はバレンタインデーがメインになるだけなんだから。それがなくなったって、ひなまつりとか体育の日とかが結局は代わりになるに違いないんだよ。

もし敬老の日にカップルの予約でレストランが埋まっちゃったら、おじいさんおばあさんになけなしのお小遣いをはたいてご馳走しようとした優しい孫が悲しむでしょ？」

説得力のあるようなないような説教をうなだれて拝聴しているとき、ゴーグル男のインカムのアクセスランプが点灯した。

「こちら二隊。現在地ははんぺん小路の居酒屋です。どうぞ」

ゴーグル男は応答を告げてから、目の前の何かを読み上げるように少し頭を左右に動かした。一段低くなった声音で魔眼男に報告する。

「さつまあげ通りの喫茶店『アプフェルトルテ』の店員から通報です。客の挙動がおかしいそうです」

「おかしい？」

「カップルで来店後、女が先に出て行って、残った男が“全部やり直したい”と繰り返しているそうです」

「ああ……」

魔眼男が短くうめく。

「クリスマスなんか大嫌いだ……」

ハンドヘルドコンピューター男が違反キップを次々切りながら毒づいた。

「では、いずれ通知が行くと思うから、後日免許証持参で出頭するように」

そう言い置いて、三人の時空警察官は立ち去った。閉じたふすまの向こうで、彼らの長靴が足早に床を叩く音が遠ざかっていく。

硬い足音に紛れて、うんざりした響きのやりとりが届いた。

「――また通報です。がんもどき横丁のマジェランガイド三ツ星フランス料理店からだそうですが、どうしますか……」

「なんだと、先刻行った店じゃないか。別件か？

どのみち当隊は無理だな。三隊か五隊に要請するように伝えてくれ」

「クリスマスなんか大嫌いだ……」

窓側に行って見下ろすと、彼らが店を出たところだった。男たちは外套の襟を立て、背中を丸めて小雪舞う街路をさつまあげ通り方面に消えていった。

「……」

哀愁漂うその背中を見送ってから、俺たちは粛々と違反キップを

懐に仕舞った。しかる後に店員を呼んで、各々が一番好きな酒をラストオーダーとして注文する。

そして自分たちよりも幸薄き人々の存在を思い描きながら、心安らかに思い思いの一献を味わった。

聖夜に愛を呪う者ども（後書き）

メリークリスマス。

２０１１年１２月２０日投稿

ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ６２０６ｚ／

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1930ba/

過ぎし短編酒場

2012年1月5日01時50分発行